

佐久間稔の「遺言」

小田 実

「建築ジャーナル／近畿版」2000年1月号の「論評」に、私は「ゆうが来た日本」と題した一文を書いている。「ゆうが来た」とは、大阪で昔から使われてきた言い方で、もとは布ぎれや着物について言ったことばだが、古くなってほころびが出ている、もう使いものにならない、という意味のことばだ。

そのころいくつも「ゆうが来た」事件や事態が相次いで起こっていた。新幹線のトンネルの壁が落ちた。バケツを使つての手抜き作業をやつてのけて、「核」工場で臨界事故を起こす。悪事を取り締まるはずの警察がさんざん悪事をやった上で隠す、隠しに隠す…。

たしかに万事にわたって、「ゆうが来た日本」だ。私はそう書いた。

そのときから2年半、さらにいっそう「ゆうが来た日本」に私たちは直面している。いや、その中で生きている。「ゆうが来た」事例はあまたあるが、中でも特出したのが、日本のオモテ看板のピカー企業となっているはずの、東京電力の原子力発電所の器具の損傷隠しだろう。あるいはまた、損傷隠しを2年前に知りながら、そのままインペイに協力してきた役所—これもまちがいなく「ゆうが来た」。

2年半前の「ゆうが来た日本」の中で書いた私の友人のことを、ここでもう一度あらためて書いておきたい。彼はさらにその数年前、「核」に深く携わる人間は必ず「ガン」で死ぬという彼の確信通りガンで死んだが、ここで彼の名前、佐久間稔を明らかにしておきたいのは、彼がよく私に言ったことばが、今、「遺言」としてあらためてよみがえってきているように思えるからだ。彼は、原子力の「平和利用」(懐かしいことばだ)の

草分け的存在として当時は、いや、たぶん今でもその世界では知られた人物だった。

私が彼にはじめて会ったのは1958年、アメリカ合州国へ留学したときだった。彼がいかにその領域で草分け的存在であつたかは、日本における「平和利用」のもとをつくった「日米原子力協定」を日米間で締結したときの日本政府代表の一人が彼だったこととわかるだろう(彼はそのとき28歳。いかに「原子力」が「若い」産業であつたかもわかる)。その後、東海村の原子力研究所に、当時の新聞の表現で言えば、アメリカから「原子の火」を持ってきたのも彼だし、初期の原発の建設にもかかわっている。

私は彼とよく議論した。私は原子力の「平和利用」に反対だが、彼は、もちろん賛成。ただ、2つ条件をつけた上でのことだ。ひとつは、「原発は、もっと安全なエネルギー源を得るまでのつなぎだ」。そしてもうひとつ。これを熱心に彼は述べた。「オダよ、怖いのはこれからだよ。おれたちはとにかく事故を起こさないように必死にやってきた。しかし、これからはわからん。設備が古くなり、みんながタカをくくり始める。世代交代で、新しいのが出てくる。そいつらは怖いもの知らずになんでもできる、安上がりにやれるとどう慢になる。そのときが怖い」。

彼は生きていれば、損傷隠しの責任を取って、いや、取ってみせたように辞めた東電幹部より年長の世代だ。▲

おだ・まこと／作家。1932年大阪生まれ。災害被災者への公的支援を求める「市民＝議員立法実現推進本部」代表。自らも阪神・淡路大震災の被災者で、西宮市の自宅と仕事場は大きな被害を受けた。現在も「生活基盤回復支援法」実現のための「市民＝議員立法」の運動を続けている。



今年 2003年のことは
平和。

このことばとともに、新しい年を迎えます。

小田 実、小田 なる、玄 唯恵

賀
正



The word for this year 2003 is

Peace.

with this word, we send you our
new year greetings.

ODA Makoto, Nara, Sano Hyun

けつての 年たすのイヤの
け久内君とこのしで一
そりさすに。お送り
いたします。

小田 実

2002年 年永

